

立ち上がり動作分析における 作業療法士と作業療法学生の 着眼点の違い

～学生の今後の臨床実習に活かすために～

ゆきよしクリニック

作業療法士 中川由子

はじめに

臨床実習を通し、学生は患者の動作からどのような視点を持ち問題点抽出するとよいのか分からず難しいと感じた。

作業療法士(以下OTR)と作業療法学生(以下OTS)の動作分析における着眼点の違いを明確にし、今後の臨床実習、臨床場面で効率よく患者の問題点抽出を行えるようになることを目的に研究を実施した。

対象

被験者：12名

OT臨床経歴5年以上のOTR：6名

評価実習を控えたOTS：6名

研究方法①

- 左片麻痺模擬者の立ち上がり動作を撮影し、映像を見てOTRとOTSが動作分析をする。

模擬者の設定：年齢・性別：20代前半・女性

疾患名：脳出血（右被殻・視床）

障害名：左片麻痺

研究方法②

- ・ 動作分析内容をアンケート用紙に記載する.

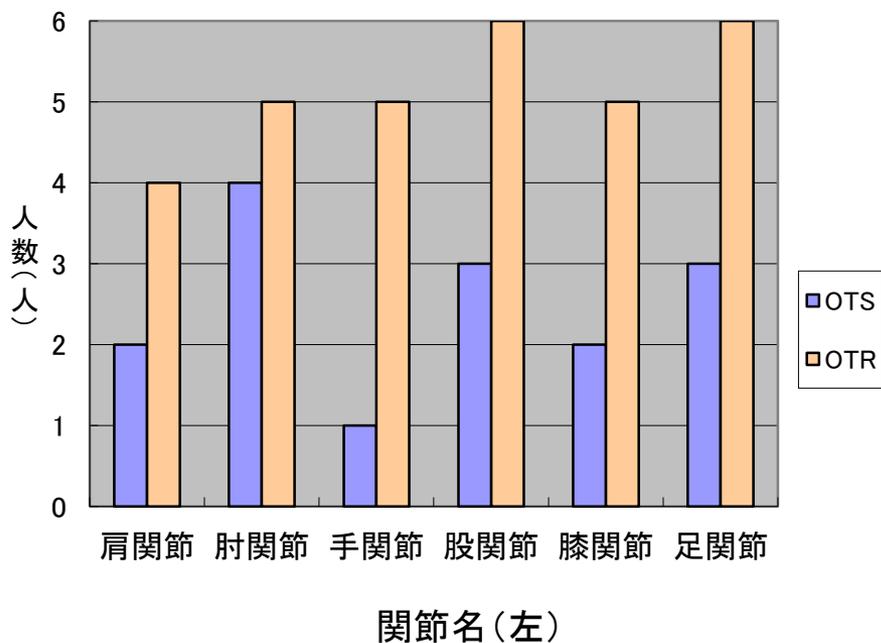
<記載内容>

- 1) 「着目した関節部位」
- 2) 「分析内容」

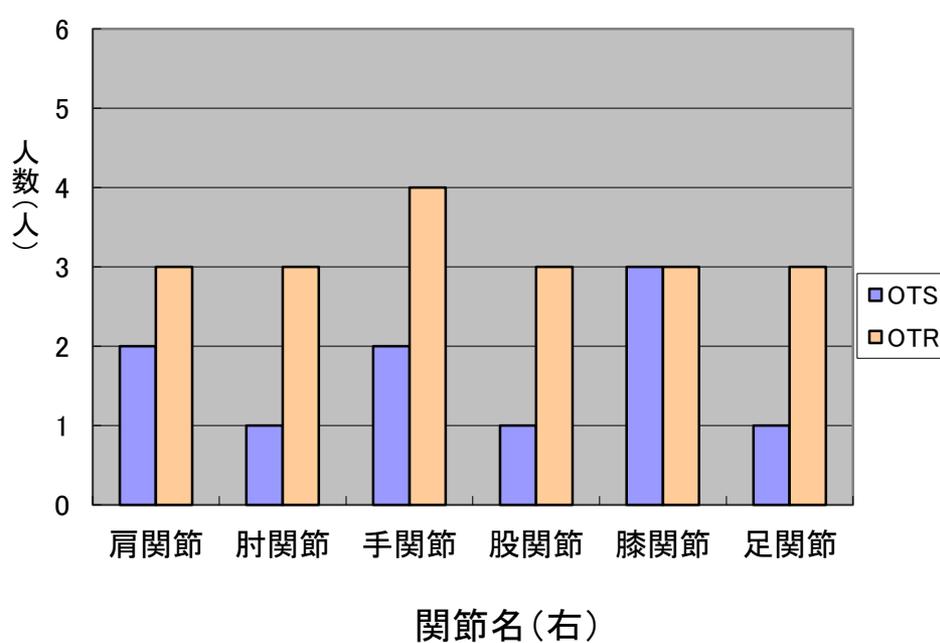
結果①

「着目した関節部位の○印の個数」の比較

着目した関節部位の○印の比較



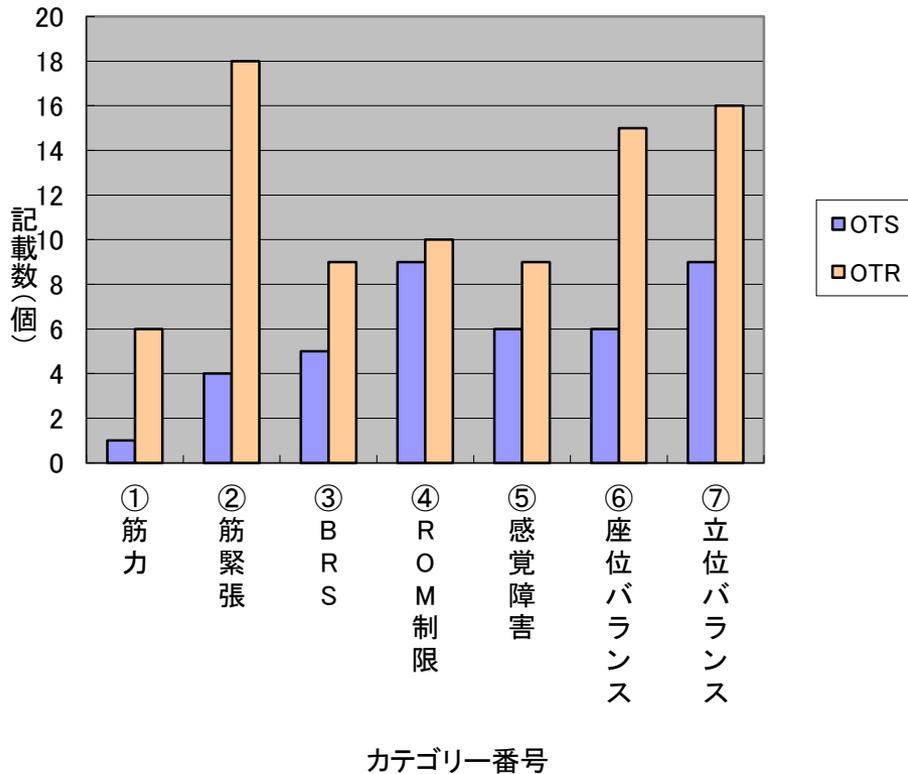
着目した関節部位の○印の比較



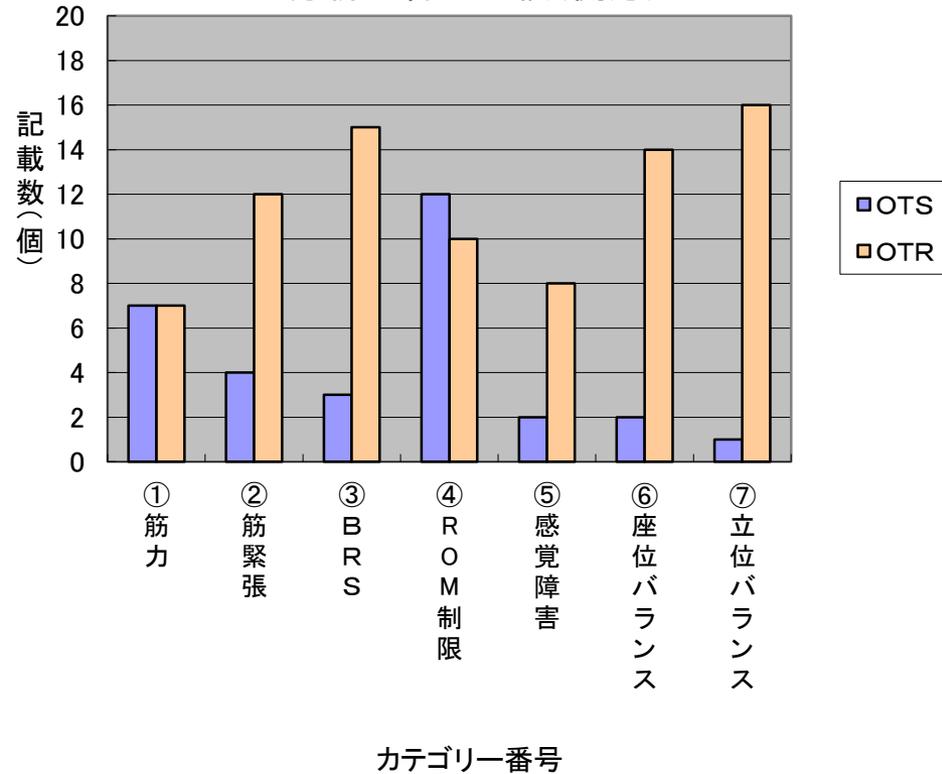
OTR群は棒グラフの伸び具合が横一線になっており、身体全体に着目している
OTS群は棒グラフの伸び具合にばらつきが目立ち、左肘関節を中心に着目している。

結果② 「分析内容」の比較

分析内容の比較(前方)



分析内容の比較(側方)



OTR群身体機能全体を問題点として着目している傾向がある。
OTS群は関節可動域制限(以下ROM制限)に重点をおいている。
全体的にOTR群に比べ、OTS群は問題点の予測が少ない

考察

OTS群は着目している関節部位に偏りがみられ
問題点列挙ではROM制限を多く挙げていた。



OTS群は目で見える異常動作にばかり目が向き
局所的にしか問題点を捉えていないと考える。

OTS群は感覚障害を問題点として予測する人が
少ない。



病巣から起こりうる障害像を予測することができ
ていないためと考える。

改善策

- ・疾患における障害像、評価項目の意義や目的を理解する.
- ・他者と分析内容を話し合う.
- ・ICFを使用する.